

将来にわたって、本学科が創設当初の「持続可能な社会への転換」という志を持続しつつも、学生、卒業生、社会のニーズに応えるためには、どのようにあるべきか。今年度は、学部再編構想の一環として、教育組織と教員組織の分離（教教分離）および学科の体制・名称について議論を行った。意義のある改革となるよう、来年度からは具体化に向けて、粘り強い合意形成・意思決定が求められている。

環境建築デザイン学科のこの一年

芦澤 竜一

環境建築デザイン学科長

昨年度末に松岡拓公雄教授と高柳英明准教授が異動となり、11名の教員に加えて、今年度は2名の新たな教員が加わった。4月には金子尚志先生を准教授として迎えることができた。金子先生は、環境工学と設計をつなげる研究を行ってきており、自然エネルギーを利用したパッシブデザインの実践と研究の実績を多く持つ。環境建築デザイン学科の名に相応しい先生であり、環境エンジニアリングと建築デザインを統合する姿勢から学生達が多くを学べることを期待している。さらに10月には山崎泰寛先生を准教授として迎えることができた。山崎先生は、これまでの学科教員にはいない専門分野の持ち主で、建築雑誌や書籍の執筆・編集に長年携われ、建築理論と環境・社会との関係に強い関心を抱いており、現代社会の中での建築の役割について批評・考究してきている。社会において建築とは何かと問う姿勢は、この時代に建築の真の価値を学生が考えることを後押しし、私も含め学科教員も厳しく批評されるのではないかと内心どきどきしながら山崎先生の新たな息吹をととても楽しみにしている。金子先生と山崎先生には、教育、研究活動の益々のご活躍を期待するとともに、大学運営への貢献にも期待したい。

今年度の卒業研究は、23名が論文を、33名が設計を行った。例年に比べ、設計を選択する学生が多い年であった。最終の発表会はメインイベントとして大いに盛り上がった。全体的に論文はこつこつと時間をかけて積み上げた良作が多かった。一方で設計は、プロジェクトにかける情熱とパワーの物足り

なさを感じた。下級生がこの発表会から多くを学び、今年度の反省を踏まえ、来年度以降、この卒業研究イベントが更に発展した展開となることを大いに期待している。

また本学科は、例年学生の国際交流を積極的に取り組んでいるが、8月5～6日にタイのコンケン大学と合同ワークショップが信楽で開催された。本学科からは、学生13名、教員3枚が参加し、カンボジアにおける災害時を考慮した設計提案に取り組んだ。また11月11～14日には、フィリピンのサン・カルロス大学との合同ワークショップが本学にて開催された。本学からは、学生16名、教員3名が参加し、彦根の商店街の再生の設計提案に取り組んだ。学生が国際交流をしながら建築を共に考え、つくる姿勢も板についてきた気がする。

また今年度も地域と連携した学生主体の活動が多くみられた。白井宏昌准教授、永井拓生助教が、学生達と共に近江八幡でヨシのドームをつくり話題となった。川井操助教はVOID A PARTのプロジェクトで地域活動を続けている。陶器浩一先生は継続的に気仙沼の復興支援の活動などを続けている。

学科教員、学生が国内外の様々な地域で展開する活動は、年々活発となってきている。今後も滋賀から世界にまたがり各地域での活動が、教育・研究・地域貢献の場となりながら、益々発展していければと願う。

生物資源管理学科のこの一年

大久保 卓也

生物資源管理学科長

2016年度を振り返って、学科として重要な出来事を3つ挙げると、①教教分離の動きに伴う学部・学科組織の再検討、②推薦入試および前期・後期入学試験における競争倍率の低下、③学科カリキュラムの再検討、になる。

①の「教教分離」とは、教育組織と教員組織を分離して、学部・学科の枠を越えて社会ニーズの変化に応じた柔軟な教育カリキュラム編成ができるようにする、また、研究面でも柔軟に研究プロジェクトが組めるようにしようという考え方、構想である。2016年度は、井手学部長の指示のもと、各学科で